

『国語通信』・『こくご通信』について

——戦後国語教育史におけるその位置——

浜 本 純 逸

それまで、子どもたちの個性を無視して教えこむことに忠実であつた多くの教師たちは、敗戦というショックに呆然として、しばらくは方向を見失つていた。学校は焼かれてしまい、教えるための建物すらなかつた状況にもかかわらず、一九四七年四月からは義務教育の延長として三年制の中学校が設置されることになつた。同年二月に「学習指導要領国語科編（試案）」が発表され、「四八年二月、この指導要領の趣旨徹底をはかるため、文部省主催の第三回新教育研究協議会が実地授業を含めて、全国を八地区に分け、教師・視学に伝達する目的で開かれ、新教育への全面的な切り換えを上からの立場から要求し、単元についてもいくらか伝えられたのだが、その五月二七日から六月三〇日まで、全国を七地区に分けて実施された全国教育指導者養成協議会によって、単元学習は全国に知らされていった」（高橋和夫「戦後国語教育史（三）」、「教育科学・国語

教育15」一九六〇・五・一 明治図書 一一九ペ）のである。敗戦ショックのほとぼりがさめていくにつれて、新教育の理念もしだいに理解され、衣・食・住の極端な貧困にもかかわらず、むしろそれ故に教師たちは子どもたちの未来に望みを託して、希望のみを支えに新しい国語教育をめざして実践がはじめられたのであつた。

ここでとりあげる『国語通信』は、このような全国的な気運を背景に一九四八年一月一日に一号が発行されている。新しい制度によつて生まれた中学生に対する国語教育を切り開いて行こうとして発行された読み物と投稿の雑誌である。編集者は、真川淳、清水文雄、松永信一、若林博であり、発行所は、広島教育図書刊行会（広島県佐伯郡廿日市町西新町）であつた。

この雑誌が順調に発展して行き、多くの人々から喜びをもって迎えられるので、かねて計画されていた、小学校上級生（四年生以上）を対象とした『こくご通信』が一九四九年五月一日より同編集陣、同刊行会によつて発行された。

『国語通信』は三一・三二合併号（一九五〇年二月）を以て終刊となり、「こくご通信」は一七・一八合併号（一九五〇年二月）を以て終刊になっている。ともに、たて二〇・一センチ、よこ一八・九センチの大きさで、各号一二ページの小さな新聞に似た雑誌である。

二

発行の趣旨を「国語通信 指導のしおり 一号」（一九四八・一〇・一）において、編集代表者・真川淳氏はつぎのように述べている。

「新教育の実践に当って、現在痛切なる動揺と混迷とを感じている者の筆頭として、おそらく国語教育者があげうるであらう。戦前から戦中にかけては国民精神の涵養に専念し、戦後の切換えには児童心理に立脚しての文芸美を以て当面の教育目標とし、更に極く最近には言語道具観の抬頭によって、いたく逡巡しているのが多くの国語教師の現実の姿といつてよからう。文部省編修の指導要領の意図するところも幾変転の後、漸く一応のまとまりをほの見せているといった恰好であつてみれば、国語教師たるものおのずから不安を感ぜざるを得まい。しかし動揺と混迷の中にも、これを貫く一道のあることを確信する。それを支えるものは伸びつつあるところの若き生命の躍動に外ならない。そこには枯渴せる形式主義は必要としない。みずみずしい生命の泉の中に、若人を存分に沐浴させ活動せしめることだ。しかも自発性の根源力は滋味な基礎学習にまつところが大きい。こゝに着眼して、わが『国語通信』は編まれたのである。」

『国語通信』の内容と構成を知るために一号の目次を掲げるとつぎのようである。

海辺の少年 南蛮寺萬造

—— 小品文 ——

ひよこ二題 赤井道子（三重・上野市崇広中一年）

旅の思い出 和手嘉子（広島・比婆・山内東中一年）

三日月 才塚定雄（広師附中一年）

自由詩

母の顔 上里田翠（尾道市長江中一年）

ひまわり 吉原初美（同校二年）

私の楽しい時間 藤谷周治（比婆・山内東中一年）

もくせい 為藤真美子（同校一年）

物さし 檜崎和子（同校一年）

読書室——良書紹介——

「ピルマの竖琴」 竹山道雄

「アルプスの山の娘」 ヨハン・スピリ作 永田義直訳

—— 読後感 ——

風の中の子供 岩城隆行（東京・学習院中二年）

研究室

人生と死 勝間憲子（広島・双三・十日市中三年）

歩き方と心持 宇都丹美子（広師附中二年）

娯楽室

句読点 （薄田泣菫『茶話』より）

揭示板 （編集後記・原稿募集）

この雑誌は、三つの部に大きく分けて編集されている。第一部は、巻頭の読み物であり、第二部は、児童作品の欄で、詩と作文が中心になっている。第三部は研究室、娯楽室、読書室であり、楽しみながら国語の勉強をするための資料を掲載している。

三

各号の巻頭読物欄は、「珠玉の文学作品(童話、戯曲等)を捧げることによってヒューマニスティックな文藝的教養を志し」(「国語通信 指導のしおり」 十一・十二合併号)で、当時のすぐれた作家の作品を載せている。

戦後の児童文学界では、四六年四月に「赤とんぼ」「子どもの広場」が創刊され、一〇月には「銀河」、四八年一月には「少年少女」が創刊され、文芸復興のような華やかさを示していた。子どもたちが夢を与え、ヒューマニズムの感覚を育てようと念願していたのである。この中央での文化国家を築く子どもを育てようとする動きに呼応するかの如くに、原爆によって灰に帰した地方都市・広島で、文学への道を開こうとしていたのである。

「国語通信」の巻頭読み物はつきのとおりであった。

号	作 品	作 者	年 月 日
1	海辺の少年	南 蛮 寺 萬 造	48・10・1
2	六羽の白鳥	グリム兄弟作 中井文彦訳	“・10・15
3	親 心	福 島 政 雄	“・11・1
4	安芸の海	小 山 東 一	“・11・15
5	ある日の健三	斎 藤 清 衛	“・12・1

6	ガマと古本	磯 部 忠 雄	“・12・15
7	記念 碑	坪 田 讓 治	49・1・1
8	晴 着	真 川 淳	“・1・15
9	散文詩	ツルゲニエフ	“・2・1
10	長い松林	小 田 嶽 夫	“・2・15
11	たまご(戯曲)	斎 田 喬	“・3・1
12	うわさ	磯 部 忠 雄	“・3・15
13	バスのある広場	中 井 正 文	“・5・5
14	ことばの話しあれこれ	藤 原 与 一	“・5・20
15	友 だ ち	小 山 東 一	“・6・1
16	青蛙神(中国童話)	渡 辺 末 吉	“・6・20
17	良善の門	南 蛮 寺 萬 造	“・7・5
18	お 告 げ	ヴイデンブルック 芦 田 弘 夫	“・7・20
19	少年時代の読書	なつかしい童話時代 福 島 政 雄	“・8・5
20	読書の思い出	「岩窟王」の思い出 小 山 東 一	“・8・20
21	読書の思い出	読書の思い出 中 井 文 彦	“・8・20
22	ミルテ姫物語	クレメンス・プレントナー 羽 白 幸 雄 訳 編	“・9・5
23	やせ蛙・ひき蛙	H・チースリック 南 蛮 寺 萬 造	“・9・20

24	南極探險 (一)	中井文彦	10・20
25	" (二)	"	11・5
26	" (三)	"	11・20
27	" (四)	"	12・5
28	サンタクロースのお話	H・チースリック	12・20
29	雪・正月・ことも	酒井朝彦	50・1・5、20
30	アムス・ゼンパアが不思議な国に来た話	オットー・エルンスト	50・2・5、20
31	アムス・ゼンパアが不思議な国に来た話	芦田弘夫訳	50・2・5、20
32	アムス・ゼンパアが不思議な国に来た話	芦田弘夫訳	50・2・5、20
1	小島の国 (一幕)	南蛮寺萬造	49・5・1
2	ハウフ童話 ヒルシユグルデンの話 (一)	磯部忠正訳	5・5・15
3	" (二)	"	6・6・5
4	" (三)	"	6・6・20
5	" (四)	"	7・7・5
6	3号に同じ		
7	おとなしいハンス	フラーバン	9・9・5
8	海の英雄 (探険物語)	芦田弘夫訳	9・9・20
9	" (一)	南蛮寺萬造	9・9・20
10	" (二)	南蛮寺萬造	9・9・20
11	トラといねむり和尚	坪田譲治	10・10・20
12	鼻ききの麦太郎	磯部忠雄	11・11・5
13	東海寺の鶏	南蛮寺萬造	11・11・20

つぎに「こくご通信」の巻頭読み物を掲げる。

13	大きな栗の木と小さな栗の木	南蛮寺萬造	12・5
14	なら梨取りの冒険	磯部忠雄	12・20
15	林檎	小山東一	50・1・5、20
16	蛙の王子 (童話劇)	安村秋醒	"
17	母を待つ曲 (一)	"	50・2・5、20

童話・戯曲・随想と多様なジャンルの作品に接しさせようとしており、日本の昔話、ドイツの伝説・童話、ロシアの作品、クリスマスのお話、ザビエルの伝記等と広く世界的な視野で作品を選んである。また、南蛮寺萬造(高藤武馬)、グリム、斎藤清衛、坪田譲治、ツルゲーネフ、藤原与一、酒井朝彦など、当時一流の執筆陣を迎えており、中央誌とのへだたりを感じさせない。ここに敗戦後の広島にあつて、文化国家としての日本をめざそうとする編集者たちの理想を見る事ができる。苦しい生き方を強いられる現実の子どもたちに高い文化的な香気に触れさせようとする啓蒙的な姿勢をうかがうことができる。

一方、読者である子どもたちは、編集者の意図を吸いとるように汲んでいったようである。

「○文章が美しく面白く感じた。なんとなく気持がはれくする。(甲陽学院中一年・浜尾君より)

○私は京城から引きあげてきて、ずっと『国語通信』とおなじみです。いつも来るたびに何回も何回もくり返しよみます。(三次中・三村尚子さんより) (『国語通信 10』) という声が「読者だより」に見える。

小丸芳君（広島県高田郡誠和中学横田分校二年）は、一八号の「お告げ」（ヴィルデンブルッフ）について、

「いろいろな事が起つている間にダニエル老教授が来て少年とお話する所は、何か私の心も同情しないではられない位でした。

「遊動木の端まで渡れたら、神様のお告げで、お母さんはもう一度よくなるんだ。」と少年は、思いましたが、なぜ、こんなことを、神様のお告げだと思つたのでしょうか。母重態の電報が来てダニエル教授と少年が帰って行きます。「お出で、これからお家へ帰るんだから、お母さんの所へ。」と云われた時、少年の顔に喜びの光が

浮んだ、それは母の元への唯一の望が、あつたからでしょう。しかし喜びはやがて、家へついた時果して、どう変つていられるでしょうか。云われた時のその喜び、それは少年が少年の日に味わつた最後の喜びだつたと思います。この物語は私には印象的な物語でした。」

（『国語通信 21』という読後感を寄せている。）

小丸芳君は二四号に「『国語通信 創刊一周年を迎えて』を送り、『国語通信』を待ち遠しく読み、とくに巻頭読物に心をおどらせている姿を報告している。

「こちらでは稲こぎが始まるとうとう十月の、よく晴れた日、友達が『『国語通信』をもらつて来ましたよ』といつて渡してくれたのが、第一号でした。

あの時のうれしさ、思い出しても嬉しくなる程でした。今も尚『国語通信』を先生から頂く度にその嬉しさを十分に味わう事が出来るのです。それから私は机にいたまま、初めから読み始めました。一通りよんで、その時は大切にしておきましたが、夜、私の仕事がすんでしまうと、やっぱり昼間の、面白さが忘れられず、暗い

電灯の下で何べんもくり返して読みました。特に南蛮寺先生の『海辺の少年』はもう今までに幾度読んだ事でしょう。二十二号に至る現在でも私はあの『海辺の少年』の物語が一番好きなのです。そして『国語通信』を出す度に一度は必ず読みます。その夜、私は表紙をこしらえたり、それをとじつけたり、今からもらつても、ちゃんと、一冊にまとめる事が出来るようにして置いて、眠つたのでした。

それから現在まで一部もかかさずにとじ、今はもう立派な一冊の本として私の本立に入られてあります。私の一番好きな読物は、『海辺の少年』、『晴れ着』です。今からもこのような物を、どんな書いて下さい。」

戦後の図書・雑誌などの少なかった時代にあつて、しかも田舎に住んでいた少年が『国語通信』をとおして、質の高い文学に接して、人間的に高められているようすがよくわかる。

『国語通信』はこのようにしてひとりひとりの子どもの内面において受けとめられていた。子どもたちに人間への関心を高め、文化・文学への理解を深めることに大きな役割を果たしていたのである。

四

第二部の作品欄には子どもたちの創作・詩・作文などが掲載されている。この欄の選は清水文雄先生が担当されている。ただし、詩は、一三号より宮崎丈二氏の選に変わっている。

清水文雄先生は、「生徒の表現活動は本来自由潤達なものであり、その表現形式も小品文・童話・戯曲・日記・自由詩等、種々様々のものが自由に選ばれていい筈である。若々しい生命はたえず外に向

つて溢れ出ようとし、それも固定した一つの形式によることを喜ばない。それでこの欄には将来あらゆる表現形式による生徒の作品があらわれてくるように希望する。」(「国語通信 指導のしおり1」)と作品募集の意義と期待を述べておられる。

ついで、「書く」表現生活がおろそかにされていることを激しく批判し、子ども「内なる」ものへの絶対の信頼をもって表現を指導すべきであると、つぎのように情熱をこめて書いておられる。

「文字による表現、即ち書くことがおろそかにされ出して、相当長い時が経ちました。それは卒直に認めてよい事実のようです。戦時中子供達の表現生活にまではめ込まれた乱暴な規格は、著しく彼等の自由な表現活動を阻害しましたし、戦後の思想の混乱は子供の生活を荒らし、感覚と情緒の世界を随分粗雑なものにしました。これはかつて見られなかつたほどの我々の大人のおかした一つの罪悪です。戦争そのものよりも、それから導かれた子供の世界の荒廃に對しては、我々は日夜猛省しなくてはならぬものがあると思います。書くことと自体が、思想と感情の反省・整序を経なければならぬ以上、子供の世界が、まだその出来る落ちつきをとりもどし得ていないことにも原因はあるでしょうが、またその指導に当る大人の方の教育観の変動乃至混乱にも因由していると思われます。

とはいっても、子供は意外に健康な野性をもっています。俗悪陰惨な大人の世界を軽蔑し見離し、彼等の内に息づく生命の自由奔放な発動が瑞々しい光芒をもって、むしろ大人の眼を眩惑することがあります。それは大人にとつて驚きと喜びであると共に慚愧であります。私はこの子供の内に自らにして発動する神性のようなものに絶対の信頼をもちます。そしてそこにあらわれる、あらゆる可能性

をばらむ芽を、大事にしてゆきたいと思えます。しかもその芽は眼前の事象に顛倒し錯乱した大人の眼には、えて見のがされがちであることも事実です。その点からいっても、子供に沓かせることは、子供自身の内生活の反省となると共に、指導する大人の方の反省の機が与えられることにもなると思えます。」(「国語通信 指導のしおり 9・10」一九四九・二・一、一五)

とくに詩の指導については、「子供独特の世界」を大切にすることを呼びかけておられる。

「大人には大人の世界があり、子供にはまた子供独特の世界がある。そして子供の時代に美しく豊かな子供の世界をもっていた者が、はじめて美しく豊かな大人の世界をひらいてゆくことが出来る。子供が子供の生活の中から詩をみつめてゆくことは、やがて大人となつて美しく豊かな生活をうち立て、ゆくことに役立つのである。子供の自由詩の指導に當つて、まずわれわれはこの分りきつたことをはっきりと心においておきたい。

子供があらゆる美と神秘と真実への心のおどろきを彼等の言葉で歌いあげるとき、そこに子供の自由詩が生れる。いたずらに大人の体得した「詩味」を子供におしつけて、彼等の潑刺たる創造活動を阻止したり歪曲したりしてはならない。そのかわり同じ年配の子供のつくつたすぐれた自由詩をくり返しよませるのがよい。そうすれば、子供はすぐそれに共鳴して、なあんだこれが詩か、これなら自分にだつて作れると簡単に自分の生活の中から詩を見出してゆくだろう。今月とつた四篇の詩もその心持でよませて頂けばよい。」

(「国語通信 指導のしおり3」四八・一一・一一)
清水文雄先生は、選評において、

「年少者の詩作には、田場めぐみさんの詩に見えるような、とぎすまされた感覚で事象を正確鋭敏にとらえる、あのような行き方がのぞましい。殊に少女には、早くも或る気分に陶醉して了つてびちびちした感覚が影をひそめてしまうことがありがちであるから、指導に当つては注意を要する。」（『國語通信 指導のしおり4』四八・一一・一五）と述べられ、また、

「自由詩は生徒の感覚をみがく立場から最も適当なものと思われず。長い散文には到るところに破綻を見せる者でも、短い自由詩では瞬間的な感覚の鋭角をピカツと見せて佳作を物する場合が往々あります。大人から規格を与へないで、見たり聞いたり感じたりしたことを自由に表現させる、そのための環境と条件を先生方の方で作つてやつて頂けばそれでよいのだと思います。詩の題材は固定したものであつてはいけません。生徒の感覚がたえずとぎすまされて、感覚の地肌が常に対象に向つてひらかれてあれば、到るところに彼らは素材をみつけ出すことができます。その意味から本号にとつた「工場見学」や「おいも」や「停電」などは、こんな所にも詩があるかと、よむものに感じさせるところに、詩を見出ししていると思います。」（『國語通信 指導のしおり6』四八・一二・一五）と述べられておられる。

清水文雄先生の当時の児童詩指導の目的観は、「自由詩は、子供の感覚をみがき、観察の態度をつくる上に有益だと思ふ」（『同前、9・10』）に端的に述べられていると思う。

このような広く自由な立場から募集された詩の中に大江健三郎の詩があるので、そのすべて三篇を紹介しておく。

雨だれ

大江健三郎

（愛媛・喜多・大瀬中二年）

雨だれに景色がうつつている。
小さな小さな景色だ。
校舎も小さくうつつている。
生徒も小さくうつつている。
そして小さく動いている。
雨だれの中に
小さな世界があるようだ。

（『國語通信 9』）

幸福

大江 健

（愛媛・喜多・大瀬中二年）

土ぼこりのひどい道を
まずしそうな夫婦が
黙々と歩いている。
復員服の男。
子供をおぶつた女。
ふと女がたちどまつた。
大きな息をはいて
髪のはつれをかきあげた。
男もつとたちどまつて
子供をのぞきこんで
にこつとほほえんだ。
夫婦は又黙々と歩き出した。
私はこの後姿に

ほのぼのとした幸福を感じた。(『国語通信13』)

濁流

大江健三郎

(愛媛・喜多・大瀬中三年)

うずまけ濁流

ほえる濁流

田畑をのめ

材木をおし流せ

百姓どもの不安そうな目も

材木業者のなげきのひとみも

さかまく濁流よ 一のみにしろ

そしてごうごうとがいかをあげよ

そこには

生活の不安もない

死への恐怖もない

ただ男性的なげしい

生きることのよるこびがあるばかりだ。

(『国語通信20』)

大江健三郎らしい、鋭い感覚、やさしさ、生命感を求める心のあらわれた詩である。大瀬中学からは、他の子どもたちも数多く投稿しており、熱心な指導者がいたことが推量される。のちに大江は、詩のことに直接ふれてではないが、「戦後、新制中学、新制高校をつうじてデモクラシー教育をうけた。しかもそれを農村でうけた、それが自己形成の上で重い意味をもっているのを感じる。」(『新鋭

文学叢書12 大江健三郎集』一九六〇・六・一五・筑摩書房刊 年譜)と述べている。大江の文学的な心を育む場として、中学校『国語通信』があったことを想像することもあながち的はずれにはなるまい。

作文においては、「ともかく、書きましよう。おつくうがらずにね。「りっぱなものを……」なんて教えずに、思うことをどんどんそのまま書いていきましょう。」(『国語通信 29・30』一九五〇・一・五、二〇)と松永信一氏が書いておられるような考え方で募集されたのであるが、小学生の投稿作品の中に、ある時、八月六日の体験を書いた作品がまじっていた。その作品を読んだ時の感動を選者はつぎのように記している。

「この作品には、文題がついていませんでしたので、編集者の方できりに『八月六日』とつけました。ちょうど八月六日の朝八時頃、皆さんの作品を読んでみようと思つて、数多い作品の中から、なにげなくこの無題の一篇をとり出して読んでみますと、四年前の八月六日のあの一瞬からの、いたましい体験を書き綴っているのです、そのふしぎな一致に、強く感じさせられました。まだ充分練りかえされていないところがありますが、同じ原爆を体験している私にとつてそんなことは問題ではなく、ただ涙と共に読んだのです。私も、あの当時、死体といっしょにね、毎日目の前で三人、四人と死んで行くのを見ていますのでこの作品の短い描写だけで、充分わかるのですが、他の人はどうでしょうか。

このような、忘れようとして忘れられないほどの強い体験は、思い出すままに書き綴つても、りっぱな作品になります。この作品も、まだまだ深く細かく思い出して書きなおしたら、もつとりつぱな

のなるでしょう。』(『ごくご通信 7』一九四九・九・五)

その作品は、被爆直後の逃げる時の様子や母を看病した時の様子を原稿用紙約九枚に克明に書いたものである。一部分をつぎに引用しておく。

八月六日

高田勝子

(広島県芦品郡近田小学校六年)

……前略……

私はシミーズ一枚はだしでにげました。妹はシャツパンズでにげました。にげるとちゆうふと気がついて、お母さまからいつもお母さまとはなれた時には、妹とわかれないうちに手をにぎり、ぬれ手ぬぐいを口におそつてにげるように教えていたことを思い出して、にげるとちゆうで、私のシミーズをひきやぶつて、二人で口をおそつてにげました。

妹と私は、けいぼうだんに助けられ畑におりましたら、お母さまが、けいぼうだんにおわれて、私のところへ来ました。その時のうれしかったこと。妹・私・お母さま三人手をにぎって泣きました。お母さまを見れば、右の目はげんしに取られ、顔はガラスでぎざぐらけになり、前のお母さまの顔はどこへいったやら、かげかたなく、これがお母さまかとうたがわれるほど変り、ほんとに気の毒なお母さまになりました。……後略……』(『同前 7』)

この年はまだ、原水禁運動ははじめられておらず、広島市民は「あきらめ」るために、平和祭を行なっていた時期である。被爆の実状に触れることは禁じられていた。

そのような時代状況にもかかわらず、純真な子どもが、体験した

ありのままを書いて作文として投稿し、編者はそれに感動したのであった。

『ごくご通信 8』には、永井隆編「原子雲の下に生きて」という子どもたちの被爆体験文集が紹介されている。『ごくご通信 13』からは、被爆体験記録が掲載されていくが、その趣旨を語る中で、編集者は、世界平和のために「広島原爆記念文集」を、広島大学東雲分校教育研究所の国語研究室が中心となつてつくることになつたと報告している。『こんど広島大学東雲分校教育研究所の国語研究室が中心となつて、あの世界人類が永久に忘れることの出来ない、八月六日の思い出を、皆さんのいつわりない心から、ありのままにうつしていただき、それを世界平和の一等大事な、一等たしかないしずえにしたいと思ひ、』「広島原爆記念文集」をつくることになりました。すでに広島市内の各学校の先生方のお骨おりによつて、日皆さんの真心の記録がたくさんあつてきています。いづれ一冊の本になつて出るのでありますが、それまでに何篇かずつ本誌と中学の「国語通信」に毎号のせてゆきたいと思ひます。さしむき本号には爆心地にちかい中島小学校の、谷本さん、村田さん、大武さんの文章をのせることにしました。一々の文章を批評することははぶいてありますが、皆さんは、これらの文章をじつと心を落ちつけてよむと、そこに何かを世界に向つて訴えようとする、はげしいものがあるのに気がつてしよう。』(『ごくご通信 13』)

この趣旨にそつて『ごくご通信』と「国語通信」に掲載された、被爆体験の記録はつぎの一八篇である。

あの日の記録(一) 『ごくご通信 13』

八月六日の思い出 谷村升子 広島市中島小五年
八月六日 大武節子 " 六年

あの日の記録(一) 「こくご通信」 15・16

ピカドンの思い出 長谷保典 広島市古田小六年

平和の喜び 湯尻洋子 " 六年

平和への祈り 土井英輝 " 六年

あの日の記録(二) 「こくご通信」 17・18

原子ばくだんの思い出 国村佐代子 広島市尾長小四年

げんしばくだんの思い出 井上令子 " 四年

げんしばくだんの思い出 大原勝人 " 四年

原子爆弾の思い出 前田法子 " 五年

原子ばくだんの思い出 大槻潤子 " 五年

原子ばくだんの思い出 石田敦子 " 五年

原子爆弾の思い出と将来への希望 後藤雄子 広島市尾長小六年

原子爆弾の思い出と将来への希望 重谷昌江 " 六年

「国語通信」 29・30

原爆当時の思い出 藤井昭子 広島市段原中一年

「国語通信」 31・32

原子爆弾の思い出 松村従子 広島市段原中一年

あの日の思い出 山口武雄 広島高師附中二年

原子爆弾の思い出 才野瀬道子 広島市幟町中三年

原子爆弾の思い出 河野信夫 " 三年

『広島原爆記念文集』のための作文募集をはじめのきっかけになつたのは、あの無題の高田勝子さんの作文であつたのではなからう

か。世界的な平和運動、原水禁運動に大きな影響を与えた『原爆の子——広島少年少女のうたえ——』(岩波書店)には、一九五一年八月六日づけの編者・長田新先生の序文が付せられている。

『広島原爆記念文集』の編集は、『原爆の子』の編集発行と何らかの関係があるかもしれない。もしあるとすれば、高田勝子さんの無題の作文とそれを掲載した『こくご通信 7』とは、『原爆の子』編集の引き金を引く役割を果たしたようにも推量される。この点については今後の調査を期待したい。

『国語通信』と『こくご通信』の作品欄は、まず第一に当時の子どもたちに表現の場を提供したことによって評価されなければならないが、そのことの結果において、大江健三郎の詩を生み、原爆記録の作文を掲載したことによつても高く評価されなければならないであろう。

五

卷末の研究欄は、ことばの生活全般について広く考えていく場として編集されている。この欄は、主として松永信一氏が編集にあつてはいるが、その意図を松永氏は、『国語通信指導のしおり』でつぎのようにみずみずしく語っている。

「私はいくつかのシーンを想像する。

「今日はね、僕の問題を一つ考えてほしいんだが——。青空教室がい。国語通信をもつて、あの芝生へ行こう。」

「こほろぎが逃げ出したりする芝生の上へ腰を下ろしながら「実は……」と先生が切り出す。「三次中学の生徒から、今日ね、(1)僕達

はどんな本を読んだらよいのか。(2)どのように読んだらよいか。といふことで僕の意見を求められたのだが、君達はどう思うか。考をきかせてほしいんだ。

「読書室」はこのような具体的な問題から出発して生徒の読書生活の自覚を深めることに活用できる。……中略……

新聞の記録当番が学校の帰り道「人間の死」「歩き方と気持」の二つを友達に読んでもらって、それと異った考がないかを聞いて記録している。

——集められた資料はクラスの新聞又は「国語通信」に送られる。或は自由研究の時間の共同研究資料として提出される。

——社会科でも国語でも理科でも、その学習中にふと誰かが言ったことばの中に「はアなるほど」と思うような事があったらすぐそこで記録する。そして送っていただきたい。当番記者が自分の識見によつて判断し、拾いあげ、発表することは個性の自覚を促し、責任感と勇氣とを養うでしょう。

これ等のことは胎動しつつあるワーク・ユニットと矛盾するものではない。(1)内面的欲求の自覚に立って(2)計画をたて、活動する。その活動の方法を暗示しその志向の深さへ開限せしめるものとして、ワーク・ユニットの要所々々にこれは活用せられ得る。」

生活の中から、問題のみつけて考える、という趣旨であるから各号でとりあげている問題の項目は、当然のこととして、一定しない。したがって例示しにくいのであるが、二つの例を目次によつて示してみる。

「国語通信」3 一九五八・一一・一

日本文学への道・1 はじめに

清水文雄

アメリカの国語教室 楽しい読書 木原 茂
ことばと牛
推薦図書 (児童文学社協会推薦)

ヘレンケラー女史Ⅱ 広島にて愛の激励Ⅱ
ケラー女子を迎えて 安藤法璋(広師附中一年)

「こくご通信」4 一九五九・六・二〇
綴り方が上手になるには(二)
文章の符号のいろいろ 長尾正一

国語あそび
詩を生む心

この欄には、ことばの生活への眼を豊かにするための、つぎのような連載がある。

「国語通信」

木原 茂 「アメリカの国語教室」 「話し方の時間」 2号

「楽しい読書」 3号 「研究のための読書」 4号 「研究のための読書——読む速き——」 5号 「新聞のよみ方」 6号 「作文」 8号

「作文」 8号 「作文2」 12号

清水文雄 「日本文学への道」 「1ははじめに」 3号 「2国しぬび歌」 5号 「3枯野の琴」 7号 「4和奈佐少女」 9号

清水文雄 「名作鑑賞」 「志貴皇子の歌」 29・30号 「新しい詩のかどで」 31・32号

藤原与一 「身のまわりのことば」 「(一) 21号」 「(二) 22号

南蛮寺萬造 「膝栗毛の話」 「(一) 7号」 「(二) 16号」 「(三) 28号

「こくご通信」

長尾正一 「綴り方が上手になるには」 「(一) 2号」 「(二) 4号

「こくご通信」

「こくご通信」

長尾正一 「綴り方が上手になるには」 「(一) 2号」 「(二) 4号

松永信一氏は『国語通信3』の第三部の取扱について、

「この度はどうやら『人間の思想感情はどんなにして伝わるか』というワークユニットを構成してもその時に資料として使われそうなのが集まりました。読書の秋ですからこんなユニットを自由研究の時にやってみるのもよいでしょう。『日本文学への道』は異なった言語団体の間の問題にふれてあり、『楽しい読書』は読書という伝わり方のいろいろな方法を明かにし、『ことばと牛』は動物と人間との間のことにふれ、『ヘレンケラー女史』は言語活動の二器管を閉ざしてもなほ思想や感情の伝達をなし得る方法にふれ、それぞれ主題に緊密につながるものがあると考えられます。」(『国語通信指導のしおり3』)と述べておられる。3号の第三部を資料にした場合の、単元としての教材化の方法の一例を示しておられるのである。

戦前の狭い国語教室にとじこもった教育から、単元を中心にした生活経験を広く与えていく新しい国語教育への歩みを手さぐりで試みているのである。問題点を子どもたちが自分自身でみつつけ、楽しく自然に追求し、自分自身の頭で考え、探求していくための暗示や糸口を用意して行こうと編集に苦心している。この第三部には、アメリカの国語教育の紹介を行ないながら、同時に、単元(ユニット)学習をわが国の現状に即して具体化しようと試みた、わが国の国語教育の先端の歩みが如実に現われている。

真川淳氏は、発行後の半年間を回顧して、「号を重ねること十二回、県内からは勿論、広く中国、四国、近畿等の各地方の中学生諸君から歓呼を以て迎えられ、更に東都方面からは坪田先生を初めとする児童文学界の第一線の方々からの絶大なる御支援をいただき、実に順調に意義深い成長をいたしているのであります。」(『国語通信指導のしおり11・12』、一九五四・三・一、一五)と記している。わずか一二ページの薄いものであったにもかかわらず、多くの読者に歓迎されたのである。

その理由を、

- ① 質の高い読み物を提供したこと、
 - ② 自由な表現をうながし、発表の場を用意したこと、
 - ③ 新しい学習であった、単元学習のヒントや入口を示したこと、
- の観点から考察してきた。

本誌の歴史的意義を、さらに別の観点から述べると、つぎのことにも指摘できよう。

当時としては、発足後、間がなく、もつとも問題が多く、指導内容においても方法においても未知であった中学校の国語教育に、はじめは焦点をしばって編集・発行をし、中学校国語教育への先駆者的な役割を果たしたのである。したがって、この雑誌をとおして、国語教育における新教育のあり方を具体的に学んでいった教師も多いのではなからうか。

子どもの特性、「彼等の内に息づく 命の自由奔放な発動」、子どもの探求心を尊重し、子どもに学習を強制するのではなく、子ども

もに活動の場を与えようとして雑誌の編集に取り組み、戦後の新しい国語教育を示したのである。このような子ども観に立っていたから、各号の編集後記などでは、読者に投稿、感想発表、批判をくり返し要望している。そして、実際に多くの反響を得て読者との交流の実をあげている。

このように考えると、『国語通信』・『こくご通信』が戦後の国語教育史に果たした役割は大きい。

〔付記〕

長期にわたる『国語通信』・『こくご通信』の借覧をお許しくださった、清水文雄先生に厚くお礼を申しあげます。

一九七三・二・二四

(福岡教育大学)